

# 実力主義に拾われた 鑑定士

～奴隸扱いだった母国を捨てて、  
敵国の英雄はじめました～

jitsuryoku-syugi ni  
hirowareta kannteishi

usuazimeron  
薄味メロン

Illustration  
桶乃かもく

3



MAIN CHARACTER

○主な登場人物



ルルベル

老練で豪気な帝国軍少佐。  
厳しくも温かい目で  
アルトたちを見守る。

バルベルデ

帝国軍の伍長。  
雷魔法を得意としている。

ルメル

ミルカのお付きのメイド。  
優秀で優しい。

サーラ

クールな訓練生の少女。  
成績は首席。

フィオラン

どこか残念な性格の  
お姉さん。実は弓術の  
才能を秘めている。

リリ

羊の角と尻尾を持つ、  
心優しい少女。  
アルトに支援魔法の  
素質を見出される。

マルリア

ツンデレな訓練生。  
伸び悩んでいる中アルトに  
モノづくりの才能を  
見出され、奮闘中！

ミルカ

アルトの前に突如  
現れた獣人少女(?)。  
何やら秘密をいっぱい  
抱えているようで  
.....?

アルト

本作の主人公。  
敵国である帝国軍人に  
鑑定魔法の才能を認められて  
亡命し、將軍候補としての  
第二の人生を送る。

## プロローグ リリたちの里帰り

帝都全体が魔物に襲われる事件に巻き込まれた日から六日が過ぎた。

俺、アルトとその部下であるリリ、フィオラン、マルリア、マイロくんは、魔物の親玉である狼の魔物を倒した褒美として七日間の休暇をもらった。

その最終日である今日は訓練校内にある孤児院を訪ねている。俺以外は、みんなこの孤児院の出身だから、恩返しがしたいそうだ。

「えっとえっと、今はお勉強の時間なので、こっちですね！」

大きな袋を抱えたりリの背中を見ながら、誰もいない長い廊下を進んでいく。

ちなみに俺も、隣にいるマルリアも、マイロくんも、リリと同じように大きな袋を抱えている。ただその中でも、マルリアの荷物は段違いに多い。心配で様子を見ていると、彼女はこちらをちらりと見てから口を開いた。

「ねえ。今更だけど、本当にあんたも来るの？ 面倒なだけで、利益なんてないわよ？」

心底不思議そうな顔をするマルリアに、俺は笑つてみせる。

「分かっているよ。保護施設がどんな感じなのか見てみたいだけだからさ。みんなの邪魔をする気

もないし」

「……あんたって、本当に物好きよね」

マルリアは軽く肩をすくめてから、いつまで抱え続けられるか分からぬほど大きな袋を背負い直した。

そんな袋が、両手に二つ、肩にも二つ。

大量の荷物を抱えているせいで、足元がずいぶんとフラフラしているように見える。

「そんなことより、大丈夫なのか？」

思わず口について出た言葉に、マルリアは鼻を鳴らした。

「あんたが何について聞いているのか知らないけど、大丈夫に決まっているじゃない！」

「……そう、だな」

どれか一つだけでも持とうか？ 無理をしすぎだと思うぞ？

そう声をかけたくなるが、マルリアも強情だからな。手助けしたいと言つたところで、すげなく断られるのがオチだ。

仕方なくそのまま歩き続けていると、先頭を進んでいたリリが、『教室』と書かれたドアの前で足を止める。そして覗き窓越しに中を見ると、嬉しそうに振り返った。

「アルト様！ みんないるみたいですよ！」

そう言いながらリリがゆっくりと扉を開くと、中には書き物をするたくさんの子供たちと、それ

を見守る女性の先生がいた。

授業中だつたのか……マズかったか？

しかし、こちらを向いた先生は驚いた顔をしてリリを見つめる。

「……リリさん？」

「はい！ 食材を買いすぎちゃつたので、よければもらつてください！」

持つてきた袋を揺らしながら、リリは嬉しそうに笑つてみせた。

今日は、リリたちの里帰りを兼ねた、差し入れの日。持ち込んだ大きな袋の中には、お菓子や食材が詰まっている。

それを見た先生は優しく目を細めて頷き、子供たちに向き直つた。

「みんなー！！ お姉さんたちが、お土産を持ってきてくれました！ ありがとうございますー？」

「「おねえさん、おにいさん、ありがとー！」」

下は三歳から、上は六歳まで。幼い子供たちが、目を輝かせている。

お礼を言いながらも、その視線はお菓子に釘付け。子供らしい素直な反応だな。

リリは子供たちを見て嬉しそうに微笑んでから、口を開いた。

「先生、これはどこに置けばいいですか？」

「んー、そうね。食材は一旦そこに置いてもらうとして……お菓子はできれば、直接配つてもうえないかしら？」

「え？ いいんですか？」

「もちろん。その方が、この子たちも喜ぶもの」

「えーっと……」

困り顔のリリが、俺の方に視線を向けてくる。

何を悩んでいるのか分からぬが、反対する理由はない。

俺が頷くと、リリの表情がぱーっと華やいだ。

「分かりました！ アルト様、よろしくお願ひします！」

そう言つて、俺に抱えていたお菓子の袋を渡そうとするが、それはさすがに違うだろ。

「リリたちが配つてきたらしいよ」

俺の言葉に、リリは首を傾げる。

「え……？ いいんですか？」

「もちろん」

むしろ、どうして俺が配るんだ？ つて話だ。

縁もゆかりもない俺より、リリたちが配つた方がいいに決まつてゐる。

『試験に合格して、優しい顔でお菓子を持つてくれる。そんな先輩たちに、ずっと憧れていたんです』

今回の里帰りが決まった際に、そう嬉しそうに語つていたしな。

言葉にこそしていながら、マルリアもマイロくんも誇らしげだ。  
直接配る演出も、言つてしまえば凱旋パレードのようなもの。

そう思つていたのだが、何故かマルリアの口から大きな溜め息が漏れ聞こえた。

「帝国ではこういう時、階級が高い人が配るのが当たり前。だから、普通はあんたが配るのよ？」

リリも続けて言う。

「マルリアさんの言う通りです！ 将来、アルト様の部下になる子が、この中にいるかも知れません。私たちが配るのは、やつぱり変です」

「いや、そうは言つてもなあ……」

今日はリリたちが主役で、俺はただの荷物持ちだ。これ以上、部下を増やす予定もないし……

「やつぱり俺は、端の方で見ているよ。あとはよろしく」

俺は二人にお菓子の袋を押しつけて、代わりに食材の袋を預かった。

そんな俺の行動に三人は顔を見合わせて、肩をすくめる。

そしてマルリアが溜め息をつきながら子供たちの方を向いた。

「仕方ないわね。これ以上待たせても可哀想だから、始めるわよ？」

互いに顔を見合わせて頷き、三人は準備を進めていく。ものを配るのは初めてだろうが、もうう

側はこれまでに何度も経験しているからか、その手つきは淀みない。  
机に並べられたのはクッキーに芋けんぴ、わたあめ……抹茶風味の甘納豆を選んだのは、マイロ

くんだつたか？

「それじゃあ、始めるわ！ 三列に並びなさい！ いいわね？」

「「はーい！」」

マルリアの声に子供たちは元気に返事をして一斉に席を立ち、走り出す。

「すげー、城エビのおかげ——城エビビーバーがある！」

「するい！ それぼくの！」

きやつきやと笑いながら、押し合い<sup>へ</sup>押し合い。

大量のお菓子が並んでいることもあって、子供たちは本当に楽しそうだ。

俺がこの子たちくらいの頃は、食べられそうなものを探すために路上でゴミを漁<sup>あさ</sup>っていたか、<sup>へ</sup>吐<sup>あ</sup>きながら鑑定魔法を覚えさせられていたかのどっちかだつた。

そう考えると、ここは本当に幸せな国だよな。

「おねーさん！ それください！」

「えつとえつと、これ、かな？ はい、どうぞ」

「ありがとー！」

リリが小さなプリンを渡すと、女の子は嬉しそうにはにかむ。

「ぼくそれー！ おねえさん、ちようだい！」

「いいけど、毎日頑張つてるの？」

血<sup>ち</sup>

「うん！ 勉強もお手伝いも、すつごく頑張つてる！」

「ならないわ。今後も頑張りなさい」

「うん！」

マルリアから恐竜型のチョコレートをもらった男の子は、宝物のように掲げて見ている。

教室の中にいる子供たちは、総勢四十人。

しかしそれだけではなく、別の部屋で授業を受けていた子供たちも、楽しそうな声を聞きつけて次々と集まつてくる。

「おねえさん！ ぼくたちもほしーです！」

「しようがないわね。早く入つてきなさい」

「やつたー！」

マルリアが言うと、彼らはギャツキヤと喜んだ。

しかしその横で、男の子と女の子がお菓子の取り合いを始めてしまう。

「それぼくの！ 返して！」

「違うもん！ 私のだもん！」

このままじゃマズいか？

そう思い立ち上がりかけたところでマルリアが一人の間に割つて入る。

「あーもー！ 嘘<sup>うそ</sup>喧嘩<sup>けんか</sup>しないの！ 今のは君が悪いわよ？ 分かった？」

「……うん。ごめんなさい」

「分かればいいのよ。しようがないわね、これをあげるわ。次はないんだからね?」  
謝る男の子の頭を撫でながら、マルリアは優しい声で言つた。

よかつた。うまく収めてくれたな。

一方、リリは隅の方で遠慮している子供たちに声をかけていた。

「あい 餅は好きかな? チョコレートの方が好き?」

「えつとね、えつとね。どっちも……」

「それじゃあ、小さい餅と小さいチョコレートのセットをあげるね」

「うん!」

お菓子をもらつた子は、待ちきれないとばかりに食べ始める。

そしてマイロくんも、体が丈夫ではないのに休むことなくお菓子を配り続けている。列が減るにつれて、楽しそうな笑い声が増えていく。

ここは、本当に幸せな国だ。ドラムド王国と帝国。隣り合う国でどうしてここまで違うのだろう。

そんなことをただぼんやりと思い浮かべていると――

「アルト・スネリアナ准尉、ですよね?」

不意に、俺の名前を呼ぶ声がした。

視線を向けた先にいたのは、リリと先ほどまで楽しそうに話をしていた先生だつた。

「そうですけど……確かあなたはこここの責任者のタレット先生でしたよね?」

「ええ、その通りです。ですが、責任者という地位はリリさんたちのおかげで得られたものなので、気軽に接してください」

「そうか。リリたちはこの先生に教わつていてから、彼女たちの評価が上がつたことで先生の地位も上がつたんだな。」

とはいえ、そんなことを言うなら俺だって准尉と言つて敬つてもらうほど、できた人間じゃない。むしろ、大人数の子供たちと日々接している先生の方が、よっぽど賛賛されるべきだろう。俺なら体力が持たず、一日でぶつ倒れる自信がある。とはいえ、立場上そう答えることが、かえつて相手を恐縮させてしまうこともこれまでの生活で学んできた。

俺は軽く頭を下げながら口を開く。

「本日は、突然の訪問にもかかわらず、受け入れてくださり、ありがとうございます」

子供たちを思つての差し入れではあるが、何せ突然の訪問だ。こうして先生に受け入れてもらえていなかつたら、そもそも成立していない。

これはリリたちの楽しい凱旋もある。そういう意味では俺たちの方が幸せをもらつているとすら言えるからな。

そんなことを考えていると、先生は口元を押さえて、「ふふふ」と噴き出した。

「ごめんなさい、聞いていた通りの方で、少し驚きました」

「……えーっと？」

聞いていた通りというの？俺、何か笑われるようなことをしたか？

正直な話、心当たりが多すぎて、絞り込めない。

「困惑させてしまつてすみません。『あの子たちは、すごい人の部下になつて、充実した日々を過ごしている』と、人伝にそう聞きまして

……えーっと？俺の認識と掛け離れた言葉が聞こえたぞ？

とりあえず、悪い意味で笑われたんじゃないって思つていいんだよな？

「アルト准尉には、本当に感謝しています」

「感謝、ですか？」

「はい。私では帝都どころか、地方の訓練校にすらリリを合格させてあげられなかつたでしよう」

先生は、優しい表情でリリを流し見る。

「ずっと自信のない顔をしていたあの子が、今ではすっかり、お姉さんの顔になつてくれました」

先生の視線の先では、柱の陰に隠れていた少女を見つけたりリが、その小さな手にチョコレート

をのせていた。

少女は、渡されたチョコレートを見下ろして、大きく目を開く。

そしてリリとチョコレートを交互に見てから、何故かふいと目を背けた。

「いり、ません……」

今にも消えてしまいそうな、小さな声。

「サクラは、おちこぼれだから、いらないの……」

大きな瞳は、チョコレートにもリリにも向けられずに、ぎゅっと閉じられてしまつた。

野次馬と思われる子供が周りにいないところを見ると、誰かに言わされているわけではないのだろう。自分は、お菓子をもらえるような人間じゃない。そう思い込んでしまつてているようだ。

そんな少女の手に、リリがそつと触れる。

「落ちこぼれなら、私と一緒だね」

「……え？」

「私も、ずっと落ちこぼれだつたんだよ？」

「……おねえさんが、おちこぼれ？」

少女はゆつくりと目を開き、信じられないものを見るような視線をリリに向かた。そして、ほんの少しだけ、視線を落とす。

「でもそのふく、このぐんじんさんのだもん」

少女は俺の方を見て、また俯いてしまう。

俺が着ている服は幹部用の軍服だ。幹部の部下であるリリが落ちこぼれだつたなんて、普通だつたら信じがたいことだろう。しかし――

リリは、緩やかに首を横に振りながら、優しい笑みを浮かべた。

「先生に聞いたら教えてくれると思うけど、私は何をしてもずっと最下位だったんだ」

「ぜんぶ、さいかい？ それって、サクラとおんなじ」

「目をパチパチさせた少女は、もう一度リリを見上げて、またゆっくりと下を向いた。

「……おねえさん、すごくかっこいい。サクラと、ぜんせんちがう」

少女はそれだけ言うと、リリが持つ袋にチョコレートを戻して、柱の陰に回り込んだ。

「サクラはだいじょうぶです。しようらいせいのある人に、あげてください」

落ちこぼれである自分を受け入れている。いや、諦めているのだろう。

リリに背を向ける少女の姿が、進むべき道が見えず、貴族の言いなりだつた頃の自分と重なつて見えた。

リリは、そんな少女に近付いて、もう一度チョコレートを握らせる。

「大丈夫。サクラちゃんは、落ちこぼれじやないよ。って言つても、私も助けられてばかりだから偉そなことは言えないけどね。どうやって私が自信を持てるようになつたか、知りたくない？」

リリの言葉に、少女は大きく目を見開いて、頷いた。

「しりたい、です……どうやって、おちこぼれじやなくなつたんですか？」

「えっとね。私は、ある人にアドバイスをもらって、自分ができることを見つめたの」

「あどばいす？ できること？」

「うん。私にとつてそのできることは、試したことのない支援魔法だつた」



リリにしては珍しく、得意げに笑っている。

確かに、変化のきっかけは、俺のアドバイスだった。だが、実際に変われたのは、リリが努力したおかげだ。それを彼女も分かっているから、支援魔法に関しては胸を張れるのだろう。

リリは少女の手を優しく持ち上げた。

「色々とチャレンジしてみることが大事なの。そうしたら、サクラちゃんの得意なことが、きっと見つかると思うよ?」

「サクラが、とくいな、こと……」

思わずといった様子で、少女が自分の手を見下ろす。

その手をリリが優しく包み込んだ。

「自分がダメなんじゃなくて、今の環境が合っていないだけ。そう思って、いろんなことをやつてみる。それが、落ちこぼれだった先輩からのアドバイスかな」

「……うん。ありがと、おねえさん」

リリの言葉がどれほど響いたのかは分からぬ。だが、ほんの少しだけ、少女の表情が明るくなつた気がした。

俺の隣でその様子を見ていた先生も、口元をほころばせる。

「リリさんも、マルリアさんも、マイロくんも。本当にみんな、お姉さんやお兄さんになつてくれました」

「……確かに、その通りかもせんね」

パツと見ただけでは、わんぱくな子供たちに振り回されて、彼女たちの方が遊ばれているようにも見える。だが、子供たちからしてみれば、憧れのお兄さん、お姉さんだ。

三人とも、初めて会つた時とは比べものにならないほど、強くなつてくれた。

「私が言えた義理ではないのですが、あの子たちをお願いします」

「ええ。任せてください」

俺の方が助けられてばかりだが、一緒にいて、成長を見守ることはできる。

彼女たちがよりよい未来を掴めるように、全力を注ぐ。それが俺の仕事だ。

俺は、さつきの少女に向かつて鑑定魔法を向けた。

名前はサクラ。年齢は八歳。才能は……

「整備士と戻士か。女の子は、興味を持ちにくくい分野かもな」

「えーっと……? なんのお話でしようか?」

「いえ、独り言です」

ちなみにだが、どちらもAランク。彼女は決して、落ちこぼれなんかじやない。

「まあ、あれです。サクラちゃんに、その二冊の本を薦めてみてください」

俺は教室の後方にある本棚から、ある二冊の本——「整備士入門」と「戻士入門」を抜き散り、先生に渡す。

そして、俺はひと足先に、子供たちの笑い声が飛び交う部屋をあとにした。

## 1 報告会

翌日。

いつもの通り訓練校へ行こうと支度をしていると、元落ちこぼれ冒險者で今は俺の部下であるフィオランが、目尻に大粒の涙を浮かべながら、むす一つと頬を膨らませていた。

「どうして!? どうして、お姉さんも連れていくつてくれなかつたの!?」

「いや、それはだな……」

リリたちと一緒に施設に行き、子供たちにお菓子を配つてきた。そんな話をどこかから聞きつけたらしい。

フィオランを連れていかなかつた理由は……正直な話、面倒事になる気がしたからだ。自称お姉さんを子供たちの中に入れるとどうなるのか。想像するだけで頭が痛い。

「行きたかった、行きたかった、行きたかった——!!」

仰向けて、手足をバタバタさせる姿は、どう見てもお姉さんではない。

控えめに言つて、三歳児。いや、それ以下か?

「お姉さんも、お姉さんになつて、お姉さんしたかつたのに——!!」

うん、この姿を見る限り、やはり連れていかなくて正解だつた。心の底からそう思う。だけど、まあ、なんだ。お姉さんに対する憧れが強すぎるだけで、悪気があるわけじゃないからな。フオローくらいは入れておくか。

そう思い口を開こうとしたその時、深い溜め息をついたマルリアが、ゴミでも見るような目をフィオランに向けながら言い放つ。

「ホコリが立つから止めなさいよね。そんなことして、恥ずかしいと思わないの?」「……でもでも」

目を潤<sup>る</sup>ませるフィオラン。しかしマルリアは容赦なく続ける。

「でもじやないわよ。施設にいた子供たちの方が、まだ聞き分けがよかつたわよ?」

マルリアは同意を求めるように俺、リリ、マイロくんの順に視線を向ける。

「まあ、なんだ。みんないい子ばかりだつたのは確かだな」

「はい! とつても素直な可愛い子たちでした!」

「そうですね。僕もそう思います」

少なくとも、やだやだやだ! なんて言つて騒ぐ子はいなかつた。みんな、自称お姉さんよりお姉さんだつたな。

そう思つていると、フィオランは寂しそうな目を俺たちに向けて、ゆっくりと立ち上がつた。

無言のまま部屋の隅まで歩き、膝を抱えて座り込む。

「アルトくんたちが、お姉さんをいじめる……」

床にのの字を書き、ちらちらと俺たちを見てくるフイオラン。

どうやら、変なスイッチが入ってしまったらしい。

まあ、フイオランは時間が経てば機嫌を直してくれるだろうし、話題を変えるか。

「そういえば今日の授業は、十時からだつたよな？」

俺の質問に、リリが元気よく答える。

「はい！ あと一時間くらいですね！」

今日は休み前から引き続き、警邏隊の見回りに参加させてもらう予定だ。

ここから集合場所である喫茶店、『庶民派髭おやじ』までは、ゆっくり歩いて十五分ほど。

まだ時間はありそうだな。

「教官からもつと金を使えって言われているし、店や屋台を回つてから行くか！ 前回の討伐でもらつた報酬も、まだまだ残つてることだし」

俺がそう言うと、いじけているフイオラン以外の三人が色めき立つ。

金を使うのは、金が有る者の義務。金を使えば、その分だけ誰かが幸せになる——帝国にはそんな考え方方が根付いている。教官からも常々言われているから、七連休中に、リリたちが食べにいきたい所を巡り歩いた。

狼討伐でお世話になつた訓練生のサーラも含めて、六人で合計10万エンほど使つたわけだが、それでもまだまだ余つている。

未だに金を使うことに慣れていない俺は、リリに向かつて尋ねる。

「リリ、どのくらい使えばいいと思う？」

「えつとえつと、一般的に、給与の六割くらいを使うのがこの国の常識なので、200万エンの六割で——」

「あー、うん。なんとなく分かった。ありがとう」

どうやら俺たちは、さらに100万エンほど使う必要があるらしい。

文字通り桁が違う。何を買えばいいんだよつて話だ。

今度、大金の使い方つてやつをルルベル教官に聞いてみるか？ あの人はずっと上の位である少佐だし、びっくりするほど金をもらつていてるだろうからな。

そう思つてると、マルリアが引きついた笑みを浮かべながら静かに肩を揺らしていた。

「お金が余つて困るなんて、あんたの側にいると、ほんとに不思議な笑いが絶えないわよね」

「……いや、ちょっと待て。これも俺のせいなのか？」

「はあ？ 何言つてんのよ。あんた以外に、原因があると思ってんの？」

心底呆れたとばかりに、マルリアが大きな溜め息をつく。

「通り魔の逮捕。化物退治。王国貴族の返り討ち。テロリストの捕縛。息を吸うように、手柄をあ

「……そうなるな」

「……そうなるな」

事実だけを列挙すれば、確かにそうなる。だが、それらはたまたまというか、なんというか……

「あなたは異常なのよ。早く認めてしまいなさい。いいわね？」

あんまりな言い草に、リリやマイロくんにちらりと視線を向けたが、二人とも、うんうん、と大きく頷いていた。部屋の隅にいるフィオランまでもが、頷いている。

どうやらここに、俺の味方はいないらしい。

「とりあえず変態も連れて、さつさと外に行くわよ？ お店巡りするんでしょ？」

「あー、まあ、そうだな。そうするか」

どうにも釈然としないが、反論できないのだから仕方がない。

俺たちは朝の街に繰り出した。

朝食には遅く、昼食には早い。そんな時間帯にもかかわらず、いたるところから美味しそうな香りが漂つてくる。

帝国の街は俺が初めて来た時と変わらず、活気に溢れていた。

「今朝採れたばかりの冠ブリだ！ しゃぶしゃぶにして、おろしポン酢をかけたら最高だぜ？」

「自分の手で好きな形に曲げられる器が入荷しました！ おついいかが!?」

こんな感じで大きな声で呼び込みをかける店員さんに、嬉しそうな表情を浮かべて商品を眺めている客たち。うん、今日も盛況だな。色々なお店があるのだが、その中でも特に目を引くのは、帝国の特産品である海産物だ。鮮魚や干物、海鮮丼など、海の幸を扱う店が軒を連ねている。

その中の一つを指差して、リリが嬉しそうな声を上げる。

「見てください、アルト様！ 冠ブリのフルコースがありますよ！ ブリ大根、照り焼き、塩焼き、握り寿司が、セットで1280エンみたいですよ！」

「すごいな。王国とは物価が違いすぎて、比べる気にもならない……」

王国は、とくに物価が高い。運送費や関税などの問題もあるとは思うが、十中八九、貴族様が私腹を肥やしている影響だろう。あの国は、上がどこまでも腐っていたからな。

「帰りに食べていくか？ せつかくだし、ブリカマの醤油漬けも食べよう」

「え？ いいんですか!?」

「ああ。授業が終わる時間次第だけどな」

授業は早ければ午前中に、遅くとも夕食前には終わるだろう。

冠ブリのフルコースに、ブリカマの醤油漬け。帝国のお酒も追加で頼むか。そうすれば、至福の

時間になるのは間違いない。

とはいえ、基本のセットが1280エンで、人数は五人。

「どれだけ贅沢に使つても、2万エンが限界か」

100万エンにはまったく届かないな。

「マルリアは？」何か欲しいものはないのか？」

「そうね。色々と考えただけど、どれもパツとしないのよね」

やつぱり、そうなるよな。俺はその隣のマイロくんに話を振る。

「マイロくんは？」本当になんでもいいぞ？」

「いえ、今の生活が本当に幸せで、不自由していないんです。なので、どうにも……」

俺も含めて、今まで最底辺の生活を送ってきたから、金が自由に使えるって言われても何に使つていいのかが分からんんだよな。骨の髄まで、庶民氣質が染み付いているというか……

ん？ そういえば、元冒険者がいたな！

「フィオランは？」何か思い付かないか？ それこそ、冒険者時代に欲しかったものでもいいぞ？」

冒険者は、一攫千金も夢ではない職業だ。フィオランは落ちこぼれていたものの、成功した冒険者を見て憧れることくらいはあつたのではないか。

フィオランは考え込むように手を顎に当てる。

「ん~……、本当になんでもいいの？」

「ああ、もちろん！ 予算を大幅に超えるのは、さすがに厳しいけどな」

月給も合わせて、予算は最大で300万エン。なんでもは言いすぎだとしても、大概のものは買

えるだろう。

少しだして、フィオランは活気のある街並みに目を向けて、大きく頷く。

「お姉さんは、お姉さんっぽいものが欲しい！」

……？ どういうことだ？

俺は聞き返すことにした。

「……えーっと？ お姉さんっぽいもの？」

「うん！ お姉さんっぽいもの！」

フィオランは自信に満ちた顔で頷いているが、意味が分からない。

リリやマルリアなら、フィオランの言葉の意図が理解できるかも。そんな思いで振り向くが……「関わりたくないです」とばかりに、一人とも目を逸らしやがった。

仕方なく、俺はもう一步踏み込んだ質問をすることにした。

「あー、えーっと、具体的には？」

「ん？ ん~とね。なんだと思う？」

いや、俺に聞かれても……とは思うが、考えてみるか。妹や弟がいたとしても、それがお姉さんっぽさに直結するわけではないだろう。

一番大事なのは、言動。あとは、醸し出す雰囲気か？ 面倒見のよさも重要なだろう。

……どれも金で買えないな。

「どりあえずは、あれだ。お姉さんっぽいものが決まつたら、教えてくれるか？」

「うん！ 任せて！」

「キリッとした顔でファイオランが頷くが、期待はできそうにないな。よし。深く聞くのはやめよう。あと頼りになりそうのは……」

「そういえば、髭おやじのオーナーも、大金をもらつていいはずだよな？」

普段のフランクな様子からは想像できないが、あれでも警邏隊の隊長。ルルベール教官やルドルフ少佐と同じくらい給料をもらつていいはずだ。きっと、俺たちでは考え付かないようなアイディアをくれるだろう。

「このまま警邏隊のところに向かって、隊長に金の使い道を聞いてみるか」

俺の言葉にリリ、フィオラン、マイロくんが頷く。あれ、マルリアは……？

周囲を見回すと、マルリアは俺たちの少し後ろ、とある屋台の前で立ち止まつていた。その傍らには『どんどん焼き一枚200エン』と書かれたぼり旗が、揺れている。

屋台の中を覗いてみると、鉄板の向こうに立つ店員が生地を丸く広げ、きざみ昆布、鰯節かづおぶし、干しエビをのせて焼き上げているところだつた。そこにとろみのあるソースをかけて……

周囲には、美味しい香りが漂つている。

「なんだ？ 欲しいのか？」

「ふにゃ!?」

俺の言葉にビクンと肩を跳ね上げたマルリアが、慌てて振り返る。

目を大きく見開いて、何故か頬を赤らめた。

「べつ、別に、欲しくなんてないわよ！ なんとなく見ていただけなんだから！」

言葉とは裏腹に、マルリアの視線は、鉄板に吸い寄せられている。

「でつ、でも、そうね！ あんたがどーしても食べたいって言うのなら、一緒に食べてあげてもいいわよ!?」

俺は、そんなマルリアの素直じゃない言葉に笑つてしまいそうになりながらも言う。

「あー、そうだな。小腹が空いてきたし、俺の休憩に付き合つてもらつていいか？」

金の使い道の相談は、警邏隊の授業が終わつてからでもいいからな。

「マルリア。人數分、頼めるか？」

「分かったわ！ おじさん！ 焼きたての美味しいやつを五枚ね！」

心の底から食べたかったのだろう。店員に話しかけながらも、視線は焼きたてのどんどん焼きに釘付け。恋い焦がれる少女のような視線を、鉄板の上に注ぎ続けている。

そんなマルリアの様子に、男の店員も、微笑みながらどんどん焼きを焼いてくれた。

「軍人さんには、いつも世話になつていいからね。一枚サービスさせてもらうよ」

「ありがとう！ おじさん、いい人ね！」

どう見ても、マルリアの愛らしさのおかげだろう。

「アルト様！ そのベンチが空いているみたいですね！」

そう指さすリリに、俺は頷く。

「了解。 ゆっくり座つて食べようか。 マルリア、食べられそうなら一枚食べていいからな？」

「わっ、分かったわ！ あんたが、どーしても食べられないって言うのなら、食べてあげるわよ！」  
相変わらず耳まで真っ赤だが、ソースの香りには勝てないようだ。

「マルリアちゃん！ お姉さんのどんどん焼きも食べる？ あーんつてする？！」

「しないわよ！ あーもー！ 抱きつくなー！」

楽しそうにじやれ合つて、フィオランとマルリアを横目に、俺は袋の中に目を向ける。

「これはあれか？ そのまま手に持つて食べればいいのか？」

聞くと、リリが頷いてくれた。

「はい！ クレープやガレット、はし巻きなどのイメージに近いです！」

「……なるほどね」

そう言つてはみたが、その三つにもあまり馴染みがない。

そんな戸惑いが表情に出ていたのか、マルリアが得意げな顔で口を開いた。  
「何よ？ 帝国のお物なのに、知らなかつたの？ どんどん焼ける、どんどん食べられる。だから、  
どんどん焼き。まあ、諸説はあるらしいけどね」

なるほど、一般大衆向けの商品か。

それなら、と俺は一人に言われた通りにどんどん焼きを手に取る。

「王国じや、牢獄行きだな」

「……どういう意味ですか？」

「いや、なんでもないよ」

マイロくんの言葉に、俺は首を横に振る。

王国で人目も気にせず、片手で飯を食べる姿を貴族に見られたら、下品だと言われ投獄されてしまう。それが帝国では、みんなで笑いながら食べられるのだ。

「俺はやつぱり、こつちの方が好きだな」

呟いてから、どんどん焼きを一口齧る。

ダシのきいたモチモチの生地と、旨味たっぷりのソース。挟まれている昆布と干しエビも、いい味を出している。……これ、美味しいな！

横を向くと、マルリアは一心不乱にどんどん焼きを食べ進めていた。

「どうだ？ 美味いか？」

「当たり前じやない！ 私が選んで買つてきたのよ！ 美味しいに決まつてるでしょ！」

周りを見ると他の三人も、美味しいに頗張つている。

食べ始めてから少しして、リリがハンカチを取り出した。

「フィオランさん、おくち拭きますね。ちょっとだけ動かないでください」

「あっ、うん。ごめんねー」

「いいえ。はい、もう大丈夫ですよ」

「ありがとー！ 本当に美味しいね、これ」

「ですね！」

「フィオランが欲しがつたお姉さんっぽいものからは、ずいぶん遠い気もするが……むしろ、リリがお姉さんみたいになつていてるが、フィオランが幸せそつからまあ、いいか。」

こうして、楽しくどんどん焼きを食べ終えた俺たちは、髭おやじに向かつて歩いている。  
時刻は、九時三十分。  
歩きながらもお姉さんっぽいものやリリたちが欲しがりそつなものを探したが、見つからなかつた。

「見えてきましたね！」

「そうだな。結局、三十分前に到着か」

ゆつくり見て回つたつもりだつたが、時間的には、もうちょっととゆつくりしてもよかつたかな。  
まあ、遅れるよりはいいだろう。それに、金の使い道について相談もできる。

そう考えつづ、喫茶店の入口に目を向けたのだが……

「ん？」

店の電気が消えている？ それになんとなくだが、近寄りがたい気配がある。  
入口には「準備中」の看板が立て掛けられており、物音一つしない。

出直した方がいいのか？

そんな風に首を傾げる俺の隣で、マイロくんは神妙な口調で言う。

「アルトさん。たぶんですが、人避けの魔法が発動しています」

「ひとよけ？」

思わず聞き返した俺の言葉に反応して、マルリアとリリが周囲に目を向ける。

特定の人間以外を近寄りがたくする魔法よ。授業でそう聞いたわ」

「はい。あの時は、クラスメイト以外の立入りを禁止する魔法でした。その感覚に似ていると思いません」

「どうしたらしいと思う？」

俺の言葉に、マルリアが答える。

「早めに入つた方がいいわね。ドアの前にいるのに、頭痛も吐き気も感じないのだから、私たちは人避けの対象外よ」

その言葉を引き継ぐように、マイロくんも口を開いた。

「一般のお客さんは入らない状態で、アルトさんとお話をしたい。そんな感じだと思います」

「分かった。教えてくれて助かつたよ」

前回の授業は、狼の化物が現れたせいで中断されたとはいえ、それまでは順調そのものだつた。だから今回は何事もなく終えることができるだろうと思っていたのだが、気合いを入れ直した方がよさそうだ。

「入るぞ？」

俺はリリたちと視線を合わせ、頷き合つてからドアノブをゆっくり捻る。カラランカラッと鳴る鈴の音を聞きながら、店内に目を向けた。

数日前と変わらない、アンティーカ調の落ち着いた内装。カウンターの向こうではいつもと同じように、珈琲カップを磨いていたオーナーが俺らに気付いて口を開く。

「おう、来たか。早く来てくれて、正直助かつたぜ」

オーナーの表情は険しい。

「何かあつたんですか？」

俺が聞くと、オーナーは力なく頭を横に振る。

「いや、決定的な何かがあつたわけじゃねえ。だが、少しばかり面倒事のにおいがしてな」

朗らかで快活なオーナーがこんな表情になるなんて、余程の事態だろう。

いつもならフランクに声をかけてくれる先輩たちも、今は席に座つて無言で武器を手入れしている。

ひとまずリリたちには前回と同じ席に座るように促しつつ、俺はカウンター席に腰掛けて、オーナーと視線を合わせる。

今回は牛タンや珈琲は出てこない。その代わりに、赤い紙が俺の前に置かれた。

「上からの報告書だ。読んでみな」

オーナーが指差した先にあつたのは、チユーリップの焼き印。その形には、見覚えがある。

「……女王様の王冠に入つていたのと同じ印がありますね」

「そうだな。王家に代々伝わるチユーリップの印は、帝国の象徴だからな」

その印があしらわれているということは、この報告書の出所は女王様本人、あるいは王家に連なる者——帝国の最上位だと見て間違いない。

俺は震える手で赤い報告書を広げていく。すると……

『結論を記す。王国の貴族が帝都の内部に侵入した』

『なつ……!』

冒頭に書かれた一文に、思わず声が漏れてしまう。

嫌な汗が背中を伝うのを感じながら、速くなる鼓動を落ち着けるために胸に手をあてる。大きく息を吸い込んで、視線を下に滑らせた。

『先日起きた魔物召喚事件は、魔物によって帝国を壊滅させるのと別に、王国の貴族を帝国内に侵入させる目的も兼ねていたのだと捕虜が自供した。混乱に乘じて、王国貴族が帝都内部に入り込ん

だ可能性が極めて高い。慎重な調査を求める』

必要最低限の情報だけが書かれた、簡素な報告書。しかし記された情報はとんでもないものだ。これが一般市民に広まれば、混乱は避けられないだろう。

「娘たちも見ていい。他言無用だがな」

オーナーの言葉を聞き、リリたちが俺の手元を覗き込む。

四人とも目を大きく見開いて、息を呑んでいる。

俺は話を先に進めるために、口を開いた。

「この情報が確かなら、狼の召喚が失敗前提の囮だつた可能性すらありませんか?」

「そうだな。帝国に貴族を侵入させることの方が任務の重要度としては高いだろうな」

召喚した狼で帝国にダメージを与えられればよし。失敗したとしても、入り込んだ貴族が次の行動を起こす——そういう二段構えの作戦だつたわけだ。

狼を召喚した男は、貴族ではなかつた。使い捨ての駒だと割り切っていたとしても不思議ではないな。

オーナーは一つ咳払いをして、まとめるように言う。

「そういうわけで今日の授業は、その侵入した貴族の情報を入手してもらいたい。くれぐれも国民に不安を与えないよう、慎重に行つてくれ」

「ええ。もちろんです」

王国の貴族の仕業だとすれば、他人事じやない。

今の幸せな生活を守るためなら、どんなことでもする覚悟だ。

そう決意する俺に、オーナーは続ける。

「それと、前回の授業で君たちの強さは見させてもらつた。その上で、警邏も平行してお願いしたいんだが、頼めるか?」

「はい。全力を尽くします」

俺が答えると、オーナーは全員の顔を見渡した。

「よし。今回は時間との勝負だ。前回と同じく、二班に分かれて動いてくれ。正規兵と合わせて四班体制で、夕暮れまでに情報を集める!」

「「「分かりました」」

隣に座るリリとマルリアに目を向ける。

大きく頷いた二人と共に、俺は髭おやじをあとにした。

髭おやじを出て、太陽の光に目を細める。

後ろからマルリアの声がする。

「それで? どうするつもりなのよ?」

「ん？ 何がだ？」

「この三人で、どうやつて情報を集めるつもりなのかつて聞いてるの！」

マルリアは腰に手を当て、俺とリリを見比べてから「はあ」と溜め息をついた。

「常識外れと、人見知りと……どう見ても、情報収集に向かない三人じゃない」

「あー……それはまあ、な……」

常識外れは、間違いなく俺だとして。人見知りは、リリ。マルリアもあまり自信がないのだろう。徐々に改善してはいるが、初めて会う人を前に、リリが積極的に話せる気はしないし、マルリアも、素直になれない性格が裏目に出ることも多々ある。だが――

「問題ないよ。俺たちは、俺たちにしかできないやり方で調査すればいい」

街を歩いて情報を集める。それも確かに有効な手段だと思う。だが、それだけが全てじゃない。むしろ、先輩たちと違う調べ方をすることで得られる成果だってあるだろう。

「えっと、どういうことですか？」

聞き返すリリに、俺は微笑んで言う。

「一般市民からの情報収集は、先輩たちに任せること」

「……えーっと？」

意味が分からないとばかりに、リリが首をコテリと倒す。

マルリアも胸の前で腕を組み、不思議そうな顔をしていた。

「知り合いに聞いて回る。このメンバーならそつちの方が多いと思うんだ」

手当たり次第に聞くよりも、知つていそうな相手を探す方が効率的だというわけ。俺は続ける。

「フィオランがこつちにいれば冒険者ギルドへ向かうところだが、そこは向こうに任せるとして、俺らには別のコネがあるだろ？」

しかし、いまいちマルリアはぴんときていないので、首を傾げた。

「なるほどね。なんとなくだけど、言いたいことは分かつたわ。それで？ どこへ行くのよ」

それに答えたのは俺ではなく、リリだった。

「孤児院、ですよね？」

「そういうこと。孤児院の子供たちは、周囲の悪意や不穏な気配に敏感だからね。軍や一般市民とは違う話が聞けると思うんだ」

つい最近、お菓子の差し入れをした一人がいれば、警戒されることもない。どこどこに、見知らぬ人がいた。あの道にはお化けが出る。あそこに行つたら、怖い感じがした。そんな話が聞ければ、御の字だ。もちろん先生たちにも話を聞くつもりだ。

それと、もう一つ。

「バドラとバスマル。王国から逃げてきた二人にも話を聞くつもりだ」

こつちは、俺だけが使えるコネだな。

探す相手は、王国の貴族。その嫌らしさは、俺たち三人が、この国の誰よりも知っている。

「あの二人なら、何をおいても協力してくれるはずだからな」

それこそ、命を投げ出す覚悟で。そう確信している。

相手は、帝国の幸せな生活を脅かす害悪。それ以外の何ものでもないからな。  
「分かりました。それじゃあ、ひとまず訓練校に戻るということでいいですか？」

リリの質問に、俺は頷く。

「そうなるな」

子供たちと、バドラたち。どちらに話を聞くにしても、行き先は訓練校だ。  
だが、その前に試してみたいことがある。

「ちょっとだけ、寄りたい場所があるんだ」

横道に逸れることになるが、時間的にはたいした口スではない。

うまく行けば儲けもの。ダメでもリスクは少ない。

俺たちは大通りを外れて裏路地へ。そのまま、狼の化物を見つけた屋敷の方へと向かう。

「この辺でいいかな」

立ち止まってから、俺は言う。念のためにもう一度周囲を見渡したが、人の気配はどこにもない。

「それで？ こんなところまで来て、何をするつもりなのよ？ 聞き込みどころか、誰もいないじゃない」

不満げなマルリアに、俺はニヤリと笑つてみせる。

「まあ、そうなんだけどさ。この辺りが、帝都の中心に当たる位置だつて話を聞いてさ。薄く広くにはなるんだが、試してみようと思うんだ」

俺は軽く目を閉じて、腹の中に魔力を溜め込んでいく。

薄く、広く、より遠くへ届くように。せめて名前だけでも、鑑定できるように……！

「ちょっと、ちょっと、待ちなさいよ！ 試すつて何をするつもりなの!?」

「何つて、帝都全体を鑑定してみようかと」

俺にできることは、鑑定だけだからな。

もし失敗しても人がいないこの場所なら、鑑定に関する機密がバレる心配もない。

——そう思つた矢先だった。

「——っ!?」

吐き気を伴う気持ち悪さが、俺の全身を駆け抜けた。

これはなんだ!? 不気味な気配を持つ恐ろしい何かが、鑑定に引っかかつた!?

気持ち悪さを押し込めながら、なんとかリリの杖に掴まる。

冷や汗が流れ落ち、動悸が全身を脈打つていてを感じた。

そんな俺を、リリとマルリアが不安げに見つめていた。

「あつ、アルト様……？」

俺はリリの口を慌てて手で押さえる。

大きく首を横に振り、唇に人差し指を立ててみせた。

そうして見上げた先——大きな屋敷の窓越しに、中に人がいるのが見えた。

先ほどの異様な気配は、あそこからだ。直感した。とにかく存在がバレたら、どうなるか分からぬ——そう思った矢先、正面の角を曲がり、こちらに歩いてくる先輩たちの姿が見えた。

「なつ——！」

当然ながら屋敷の中の存在に気付くことなく、歩道を普通に歩いている。物陰に隠れるような気配はない。

やばい。やばい、やばい！ どうにかしないと！

そんな思いを胸に、震える足に力を入れて走り出す。リリとマルリアもついてきてくれている。

「先輩、リリの杖を！」

先輩に向かってそう言いながら、俺は体内の魔力を高めていく。リリは一瞬でその言葉の意味を理解して、先輩たちの方へ杖を突き出した。

俺は鑑定の魔力を逆回転させることで存在を認知できなくなる、隠ぺい術を会得している。

その効果範囲は俺だけではない。杖に触れている者であれば一緒に隠れられるのだ。

——間に合え！

驚きと戸惑いの表情をしながらも、先輩たちはリリの杖に触れてくれた。それを見て、俺は全員

を覆い隠すように、全力で魔力を逆回転させる。

頼むから、見つかるなよ！

しかし、その祈りとは裏腹に屋敷の窓が、ゆっくりと開く。

☆★☆★☆

### 【アンメリザ視点】

平民の男に窓を開けさせた俺様は、窓の外に目を向けて、ショートケーキを頬張った。  
目の前で窓の外をぐるりと見回したそいつが告げる。

「敵影、ありません！」

「なーにが、『人の気配がしますね。どなたか、索敵を』だよ。無能王子が！」  
苛立ちをそのまま吐き出す。

無能の第四王子が訳の分からぬことを言い出したせいで、わざわざ敵を探さなくてはならなくなつたのだ。まったく、忌々しい。

俺様は不愉快な気持ちのまま、視線を手元にある商人から渡された壺へと向ける。  
重くて邪魔な壺だが、神が俺様の命を救うために渡してきたという触れ込みだった。俺様が死ぬ

のは、世界規模の損失だ。それについては納得できるが、重いのは氣に入らない。

俺様はその苛立ちを第四王子に向けることにした。

「無能王子め……無能なくせに文句ばかり言いやがって…」

平民の国に入るなり『敵にバレない』ように変装するべきでしょう。ここは敵地です『だの。本拠地を借りよう』とすると『田立ちすぎではないですか？ 分散して潜む方が、敵の目を欺けます』だの。文句ばかり言いやがる。

「なーにが、妥協策だ！ こんなボロい屋敷に決めやがって…」

椅子を蹴り飛ばすが、気は晴れない。

第四王子としての命令だとかなんとか言い出した時に、切り刻んでやればよかつた。

そう思うが、書類上は代表があの無能王子だということになっている。あいつが途中で死ねば、任務は失敗。俺様の昇級が水の泡となる。

まつたく、腹立たしい！

俺様はストレス解消に、先ほど窓を開けさせてやった平民を蹴りつけてから、叫ぶ。

「任務が終わり次第、毒殺だな！」

あんな奴の名が王族に刻まれているなど、國のためにならない。

「おい、そこのお前。暗殺者の手配をしろ。どびきりの奴をな！」

「!! かつ、かしまりました！」

先ほど蹴ったのは別の平民が、ビクンと肩を振るわせて、大慌てで走っていく。

貴族じやない奴は、怯える姿も気持ち悪い。だが……

「無能の第四王子は、そんな奴らに<sup>くみ</sup>与<sup>よ</sup>するのだから度<sup>ど</sup>し難<sup>がた</sup>い」

王族が平民に微笑みを向けるだなんて、意味が分からぬ。あいつは頭のネジが外れてやがる。お前は本当に、國王陛下の息子なのか？ そう問い合わせたいくらいだ。

「あっ、アンメリザ閣下。少々、声が大きいかと思われます。万が一、殿<sup>だん</sup>下に聞かれた場合を考えますと……」

「あ!?」

「コイツは今、なんと言った？

「平民の分際で、俺様に指図してんじゃねえよ！」

壺を片手に持ち替えて、空いた手で平手打ちをする。

パンチとい音はしだが、無能のせいで、俺様の右手が痛い。

「そのお前。『コイツを殺してこい』

「おっ、おまちください。アンメリザ閣下！ 私は、ただ――

連れていかれる無能が何かを叫んでいたが、聞く必要はない。

俺様に痛みを感じさせたんだ。死刑以外に、道があると思ってるのか？

「やはり平民は、考える能力がないクズだな」

大きく息を吐き出して、ソファーにどっしりと体を沈める。そして天井を仰いで、目を閉じた。

「お前ら、無能な王子様がぐだぐだ言い出す前に窓を閉めとけよ。あれでも一応は王族だ」

「はっ！ かしこまりました」

窓が閉まり、遠距離武器を防ぐための木の板が打ち付けられる音を聞きながら、俺様は呟いた。

「……俺様は、何をさせられているんだろうな」

平民の国に行けと言われて、隠れ住むような貧相な暮らし。上司も周囲も無能ばかり。子爵になるためとはいっても、面倒が過ぎる。

「それもこれも全て、勝手にいなくなつた鑑定士の責任だ」

一刻も早く捕まえて、陛下の前に突き出す。そのうえで、切り刻んでやろう。

「で？ 逃げ出した鑑定士は見つかったのか？」

「そっ、それなのですが、未だに——」

などと、騎士の男が言葉を続けようとした矢先、部屋のドアが慌ただしく開かれた。

「しゃ、失礼いたします。お部屋に第四王子——ミルカ様の姿がありません」

肩で大きく息をするメイドの報告に、俺様の口から溜め息が漏れていく。

無能の四男様がふらつといなくなるのは、これで五度目か。さすがクズだな。

「放つておけ」

「え……？」

「全員で鑑定士の搜索だ。ミルカ様もそれを望んでおられる！」

ギロリとメイドを睨むと、慌てて頭を下げる、部屋を出ていった。

腐つても王族だ。捕まつたとて、簡単には殺されないだろう。

今はそんなことよりも、俺様の任務の方が優先。無能に構つている時間はない。

「今日中に見つけ出せ！ 見つからなかつた場合、誰かが死ぬと思えよ！」

一秒でも早く母国に帰る。平民の国などに、長くいられるものか！

☆★☆★☆

屋敷の窓に木の板が打ち付けられる様子を見上げながら、ゆっくりと息を吐き出す。

緊張でこわばつていた指を一本ずつはがすように開いて俺、アルトはリリの杖から手を放した。

未だに指先や手足が震えていて、自分の弱さを自覚させられる。

「……どうにかバレなかつたな。面倒事にならなくてよかつた」

そう言って笑つてみせたが、正直まともに笑えている自信はない。

窓越しに見えたのは、アンメリザの部下だった。ということは帝国に潜り込んだ貴族はアンメリ

ザだということなのか？ あいつが、何故ここに！

そんな思いばかりが脳内を巡り、考えがまとまらない。

すると、不意に誰かの手が伸びてきて、俺の手を持ち上げて包み込んだ。

「えっと、あの……大丈夫です！ 頼りないかもですが、頼つてください！」

今にも泣き出しそうなリリが、真つすぐに俺の目を見上げていた。

温かくて、柔らかい。それでいて、どことなく不安そうな表情。

「アルト様なら大丈夫です。本当に微力ですが、私も頑張りますから」

羊の角を揺らして、リリは笑う。

そんなリリの隣にいたマルリアがゆっくりと歩き出して、何故か俺の後ろに回る。

どうかしたのか？ と思っていると、背中をバシリと叩かれた。

「自分の気持ちを押し殺してまで、周囲を気にしてんじゃないわよ！ まったく！ バカなんだか

ら！」

そう言つてから背中を撫でる彼女の手はとても温かくて、不器用な優しさを感じる。

「早めに離れた方がいいんでしょ？ さつさと行くわよ」

「……そうだな、逃げようか」

頼もしい部下に背中を押されて、俺は元上司がいる屋敷の前から逃げ出した。

来た道を先輩たちと一緒に戻り、住宅地を抜けて、大通りに出る。

帝都の街には、相変わらず幸せそうな声が飛び交っていて、人々は買い物を楽しんでいる。

その光景のおかげか、リリとマルリアのおかげか、ずいぶんと落ち着けたと思う。

「それで？ さつきはどうしたのよ？ お屋敷の窓から顔を出した奴に、何か心当たりもあるの？」

「ああ。あいつは俺の元上司——王国の貴族だよ」

マルリアの質問に対し、俺はマルリアとそれからリリだけに聞こえるように声をひそめて答えた。

しかし、二人とも驚愕のあまり大きな声を上げてしまう。

「なんですって？ あいつが入り込んだ貴族つてこと!?」

「もしかして、アルト様を連れ戻しに来たんですか!?」

その声を聞いた周囲から一斉に視線が向けられる。

先輩たちは少し離れたところにいたから、内容までは聞こえていなかつただろうが、事態の深刻さは伝わったようで、「どうしたんだ」と目で訴えている。俺が大丈夫だ、とジエスチャーで伝えると、不承<sup>ふしよう</sup>不承<sup>ふしよう</sup>といった感じではあるが、ひとまず追及はしないでいてくれるみたいだ。

俺は一人に向き直つて言う。

「話の続きを、オーナーのところに到着してから。それでいいか？」

「そう、ね。気にはなるけど、それでいいわ」

「叫んでしまつて、ごめんなさいでした……」

二人とも大声を出してしまつたことを恥じているようで、俯きながらの返事だ。

俺はそんな二人の頭を軽く撫でる。

「二人の意見も聞きたいんだ。昔話も含めて、報告の時に全部話すよ」

面白い内容じゃないから、部下には王国でどのように扱われていたかを話していない。だが、入り込んだ貴族がアメリカなら、言わないわけにもいかないだろう。

どうせなら、フィオランとマイロくんにも一緒に聞いてもらつた方がいい。

そう考えていると、マルリアが心配そうな視線を向けてくる。

「無理はしてないのよね？」

「もちろん。俺のちっぽけなプライドが傷付くくらいだな」

「そう。あんたが納得しているのなら、いいわ。ちゃんと最後まで聞いてあげるから、小さなことも漏らさずに存分に語りなさい」

ふん、と顔を背けたマルリアが、もじもじと自分の髪の毛をもてあそぶ。

俺は二人に微笑みかけた。

「心配かけてごめんな」

「いつ、いえ、私の方が、ずっと心配をかけているので！　えっと、えっと……」

リリがまたふたしながら、言葉を探すように視線をさまよわせる。マルリアは照れたように顔を背けたままだ。

その姿を見ているだけで、心がずいぶんと落ち着く。

それから俺たちは、街の中をゆっくりと歩いて帰ったのだった。  
そういうのは結局、コネを使うまでもなかつたな……

カラランカラランと鳴る鈴の音を聞きながらドアを開けると、珈琲の香りに包まれる。

時間が経つたこともあり、店内の雰囲気は出発前の剣呑けんのんなものではなく、いつもの明るい雰囲気に戻っていた。

俺たちと一緒に戻った先輩が、オーナーに声をかける。

「ただいまっす、オーナー。今日も無事に帰つてきました。いやー、後輩が優秀すぎて困りますわ」

「ふははは。早くも後輩に助けられてんのか？　まあ、お疲れさん。いつものやつでも飲んどけ」

「うつす。いただきます」

こんな感じでそれぞれ帰還の挨拶を軽く済ませ、先輩たちは奥のボックス席に着く。

すると、オーナーは俺たちに向き直る。

「おまえらも特製ドリンクな。報告会は残りが帰つてきてからにすつから、一緒に座つとけ」

「分かりました」

潜入者に関して重大な情報を得たことは、端末を通して、あらかじ予め全員に伝えた。

しかし、どう話そうか……

## 立ち読みサンプル はここまで